

# 逍遙山玉隆萬壽宮志小考

秋 月 観 暎

## 目 次

- は し が き
- 一 宮志刊行の経緯
  - 二 乾隆重修本と光緒重輯本の比較
  - 三 宮志所収記伝とその形成
  - 四 宮志所収記伝と道藏記伝との関係

## は し が き

六朝時代以降の中国思想宗教史のうえに、特異な位置を占める許遜（許真君）信仰の形成、並びに展開の過程を追跡して、継続的に進めてきた一連の考察過程において自から明らかとなったように、主題に掲げる逍遙山玉隆万寿宮とは、所謂許遜仙道教団の祖師とされる東晋の許遜以来、元代に成立する浄明道をふくめ、千数百年に及ぶ教団の頗る屈折に富む長い歴史を通じて、常に一貫して教団本拠としての地位を保ち続けてきた、江西省南昌府の名峯、西山の南に接する逍遙山の由緒ある道観である。曾て、この許遜教団の本山と称すべき玉隆万寿宮に専志とも云える詳細な宮志が存在したことを『歴世真仙体道通鑑』（趙道一撰）所収の『許太史』伝によって識つてのち、暫くその伝本を

求めて探索を試みながら目的を達しえないまま、専ら道蔵所収資料を中心に許遜仙道教団、就中、浄明道の研究を進めてきたのであるが、先年漸く当該宮志と目される乾隆五年刊『逍遙山万寿宮志』（二十巻）の存在を確認、検覆することをえた。調査の結果、本書の内容は関連道蔵資料との間に多くの重複が存するものの、玉隆万寿宮の沿革については勿論のこと、浄明道を含む許遜仙道教団全体の歴史に関しても、頗る重要な具体的資料を含んでいることが明らかとなった。その後やや暫くして、計らずも新たに光緒四年刊『逍遙山万寿宮志』（二十二巻）を繙くことをえたが、これは前記乾隆本の重輯本に当たるもので、原本に較べて新たに二巻の増補が行われているほか、各巻の内容に少なからぬ補訂・改削のあることが明白となった。この乾隆・光緒両宮志の検覆を果たしたのを機会に、ここで両志の構成、編纂の経緯、並びに両志の継授関係等について書誌学的検討を加えるとともに、所収資料の中核をなす許真君記伝の許遜信仰展開過程に占める位置を見定めておきたい。

## 第一節 宮志刊行の経緯

さきの「はしがき」に言及した『逍遙山万寿宮志』の存在を示唆する『歴世真仙体道通鑑』の記載とは、同書所収『許太史』伝の末尾に見える次の如き記述である。

真君昭靈著顕非一。屢承恩寵。事迹詳載逍遙山玉隆万寿宮志。

すなわち浄明道の祖師に当る許真君（許遜）の生涯の中で、その靈威の発現した顕著な事例は少なくなく、これに對し朝廷より屢々下された恩寵の事迹は「逍遙山玉隆万寿宮志」に詳しいと云うのであるが、この短かな記述は宮志編纂の始末を考えるに当って、一つの重要な手係りを提供している。元来『許太史』伝を載せる『歴世真仙体道通鑑』は道蔵に収録される数多くの神仙伝の中で、最も浩瀚にして且つ詳細なものであり、既に言及したように、南宗ごろ

の道士である趙道一の撰と考えて誤りないものである。<sup>(2)</sup>従つて上掲の記述を、そのまま趙道一の撰文と見なす限り、問題の『逍遙山万寿宮志』の成立年代は当然これを溯り、遅くとも南宗時代には既に存在していたと考えねばならぬことになる。筆者が久しく宮志の存在を追ひ求めてきたのも、実はこのような目論見のうえに立つたことであつたが、結論から申して、かかる見通しは誤っており、問題の上掲『許太史』伝末尾の記事は、本来『許太史伝』の本文であつたのではなく、『許太史』伝の本文中に、屢々発見される註文混入の一事例と見なすべきもので、宮志の編纂は少くとも明代初期以前に溯るものでないことが明らかとなつた。<sup>(3)</sup>果たして最初に入手せる乾隆刊『逍遙山万寿宮志』は、巻首に次の如き四篇の序文を掲げている。

重修玉隆万寿宮誌序

西蜀 岳 濬

重修玉隆宮序

商邱 吳同仁

重修玉隆宮誌序

後学 朱允元

重修許真君逍遙山万寿宮記

燕山 薰文偉

これは云う迄もなく本書が重修本であることを示するものであり、序文の撰述の行われた乾隆五年が、概ねこの乾隆重修『逍遙山万寿宮志』（以下重修本と略称）の成立年代を示すものと考えてよい。ところで、この重修本の原本について、巻首の凡例によれば

逍遙山凡旌陽先生出處。古無專志。自本朝雍正四年。同里程以貴。熊益華兩先生。網羅採訪。兼得同里喻指先生錄稿一帙。始彙成書。今仍其旧稍為編次。訂輯非有確拠不敢妄增益。是書原無古史可以博稽。若伝聞謬誤荒誕不經之事。濫為増入則以多伝疑。不如以少伝信。

によつて、原本に当る雍正刊宮志は重修本を溯ること十五年、即ち雍正四年に喻指先生の手になる録稿一帙を入手せ

る程以貴・熊益華らが、これに基いて編輯に当たり、更に郭懋隆らが協力し、編次訂輯ののち梓行したものが、この所謂重修本であることが知られる。

ところで、この重修本と、その原本となった雍正刊『逍遙山万寿宮志』（以下雍正本と略称）の編次の構成は相当異っていたようで、重修本が

本山玉隆宮與省城鉄柱宮。旧志以兩地事跡分上下二冊。今以本山為主。而以省城宮殿古蹟各以類從。繫於玉隆見統宗也。

と記すように、雍正本宮志は本山である玉隆宮に関する記述と、同じく許真君を祀る南昌省城の鉄柱宮(4)に関する記述を上下二冊に分纂したものであったが、重修本は専ら本山である玉隆宮を中心として、この上下二冊を纏めて編輯し直したことを示している。前引凡例に「編次訂輯」と特記する所以も、恐らくこの点を指すものと見てよいであろう。

さて重修本成立の沿革は叙上によって、ほぼ明らかとなったが、そのご光緒重輯『逍遙山万寿宮志』（以下重輯本と略称）に至るまでの経緯については、同じく凡例に次の如く云う。

日久板復見災。道光二十六年。豊城劉芳以所存原書。鳩賃鏤板於東粵。一無増損。今以玉隆鉄柱兩宮告成。某等不揣固陋。刪其繁蕪。補其欠漏。重為増訂。而粵板止存三分之一。其余俱照式補鑄。

これによれば、そのご重修本の板本が禍災に遭つてのち、道光二十六年、豊城の劉芳が所有する刊本を東粵において覆刊したが、玉隆・鉄柱兩宮の修造を機会に、この東粵板に大々的な補訂改刪を加えて編輯したものが、即ち重輯本であり、その刊行は光緒四年、高安の金桂馨、南昌の漆逢源の纂輯になるものである。ところで、程以貴らの纂輯せる雍正本にもまた基くところがあったようで、この重輯本の新凡例に、既に

明洪武間。練師熊常靜始有鉄柱延真万年宮紀錄類編。正徳間。道紀司鄧繼禹復増訂之。

と云う。即ち明初の洪武年間に練師の熊常静が始めて纏めた『鉄柱延真万年記録類編』を、更に道紀司の鄧繼禹が増訂したものが、重修本の藍本となっていることが知られる。これらの宮志諸本の刊行の経緯を年代順に整理するならば、概ね次の如くなるう。

- (一) 鉄柱延真万年宮記録類編 洪武十年（一三七七） 熊常静編輯
- (二) 同 上 正徳十五年（一五二〇） 鄧繼禹重編
- (三) 逍遙山万寿宮志 雍正四年（一七二六） 熊益華・程以貴 纂輯
- (四) 同 上 乾隆五年（一七四〇） 丁步上 校定
- (五) 同 上 道光二十六年（一八四六） 劉芳 重鐫
- (六) 同 上 光緒四年（一八七八） 金桂馨・漆逢源 重輯

なお、重輯本の新增にかかる「歴次編纂姓氏」の項によれば、乾隆本の前に康熙十九年福建の人である黄煜によって宮志が彙梓されたことが見えるが、具体的な宮志名が明らかでなく、彙梓の事情も詳かでない。年代からすれば当然に雍正本の前に位置づけるべきものであるが、他の上記六本の宮志との関係も不明であり、今のところ実体は不詳である。

## 第二節 乾隆重修本と光緒重輯本の比較

最初に予め重修本『玉隆万寿宮志』（二十巻）の目録によって、その構成を概観し、重輯本（二十二巻）の構成と比較しつつ、両者の相違点を明らかにしておきたい。まず重修本の目次は次の様なものである。

卷一 図……星野 輿地 邱墓 宮殿 一 卷二 紀……国典

卷三 表……歴年 籍貫

卷六・九 考……山川 宮殿 古蹟

卷四・五 伝……仙伝

卷十・二十 志……経籍 祀典 人物 軼事 芸文 復興

この目録に見られる六部、十七項目の構成は明清時代の地志類に認められる一般的形式をそのまま襲うものであり、書名を宮志とは称しながらも、本来これが逍遙山の山志の性格をもつことを示唆するものがあるが、本宮志の編纂者は、この点に関する基本的な態度を自ら明快に記して

凡自紀載旌陽先生。而外旁及淨明一派。所以兼逍遙山之全盛。如旗旒之贅于縵。林葉之依於幹。

と述べており、この宮志が旌陽先生のことを記し、そのほか淨明道のことと及んでいるのは、逍遙山の繁栄の模様を叙べる為に必要だからであって、これらの許遜並びに淨明道の記載は逍遙山と両者が恰も風になびく旗旒が終に着き、樹木の葉が幹によって繁茂するのと同様な関係にあるからであると言う。この点は前掲目次に、例えば宮殿の項が卷一と卷七とに分纂され、許遜仙道教団関係の資料を前者に集め、その他の関連資料を後者に収めるとか、芸文の項に淨明道教団、或は玉隆宮そのものと直接関係がなく、単に逍遙山の風光美を詠じたに止まる詩文が数多く収録されていることなどによっても具体的に窺いうるところであろう。重修本編纂の目的が、一見、書名から想像されるように、玉隆万寿宮の宮志の纂輯にあったのではなく、寧ろ南昌府の名山である新建県逍遙山の繁栄の模様を伝えんとするところに主眼がおかれていたことを、明白に物語っている点は注目すべきところである。

これに対し新たに二巻を増す重輯本二十二巻は藍本とも云うべき重修本に比較して、相当大巾な改訂の手が加えられている。即ち目次構成のうえで云えば、重修本の巻十四から巻十九に及ぶ六巻の芸文の内容を整理し直し、その中に収める公蹟、告示、稟呈の類を、巻二十の雜紀として独立させると共に、更に専ら奉祀資料を収録する巻二十一を新たに増補し、重修本の末尾に収める巻二十復興を最後の巻二十二に移行するなど、大巾な改訂が行われていることを

窺わしめるものがあるほか、部分的な改削・補訂の跡は大なり小なり、程度の差こそあれ、巻五・巻八・巻九・巻十の四巻を除く各巻に及んでいる。就中、重輯本が道藏その他の群書を博採して、重修本がもつ許真君事跡の遺漏の収集・増補に大きな努力を払っているほか、『宋史』列伝の中から歴代の玉隆万寿宮の提挙・提点の任にあった人物を搜し出し、許遜仙道教団の本山と宋朝重臣との繫縁浅からぬ關係を、具体的事実をもって誇示していることなどは特筆に値するが、これらは何れも前述の如く、重輯『逍遙山万寿宮志』編纂の主眼であつた重修本宮志の所謂「山志」の性格を「宮志」に編纂し直すことに伴つて、自ずから加えられた改訂・増補の跡と見るべきものであり、此等の事実は両宮志を比較した場合、重輯『逍遙山万寿宮志』が重修『逍遙山万寿宮志』に較べて玉隆万寿宮研究資料としては勿論、浄明道を含む許遜仙道教団、延いては中国道教史研究資料として質量ともに勝っており、より重要な資料的価値を具えていることを裏書きするものと云つてよいであらう。

### 第三節 宮志記伝資料とその形成

さて叙上の如く現存の玉隆万寿宮々々志兩本の比較対照を試みた結果、重輯本は重修本に較べ質量ともに優れた資料的価値を具えていることが明白となつたが、兩本が等しく巻四・巻五に収録する許遜仙道教団關係重要記伝に関する限り増減はない。ちなみに、その重要記伝とは

- |                  |            |                |
|------------------|------------|----------------|
| (一) 晋旌陽令許真君実録正伝  | 紫清明道真人白玉蟾撰 | 第二 浄明啓教蘭公姥母伝   |
| (二) 浄明道師旌陽許真君後伝  | 張司霖撰       | 第三 浄明伝教十一真人伝   |
| (三) 李長卿 浄明忠孝全伝正訛 |            | 第四 浄明際真金胡嘗許伝   |
| 第一 浄明道師旌陽許真君伝    |            | 第五 浄明経法監度師三真人伝 |

第六 浄明揚教劉先生伝

第七 浄明祠教四先生伝

## 四 付 伝

仙弟句曲許真人伝

仙弟長史許真人伝

龍沙応識白真人伝

玉陽正書白真人伝

浄明傳大師伝

浄明朱真人伝

浄明張真人伝

であるが、併しこれらの記伝は書名から推して、重修本が纂輯される乾隆当時の伝本が、そのまま宮志に収録された訳ではないようで、重修本宮志の編纂に際して、従来の許真君関係記伝に対し、記述の真偽について慎重な吟味を加え、伝承史実の取捨選択を行いながら、一方において新たに成立せる浄明道教団の本山としての王隆万寿宮志に相應しいものたらしめる為に、少なからぬ補訂を行っているが、この点について重輯本宮志の編者は編輯の際に採用し、或は何等かの理由で採用しえなかった七点の参考記伝について注記し、簡単な紹介と批判を加えながら、宮志所収記伝との関係について、簡潔な按文を付している。その七点の記伝名と撰者は次の如きものである。

- |             |     |              |     |
|-------------|-----|--------------|-----|
| (1) 旌陽先生修行伝 | 胡慧超 | (5) 旌陽後伝     | 張司霖 |
| (2) 十二真君伝   | 胡法超 | (6) 正伝叙旌陽先生事 | 白瓊山 |
| (3) 旌陽正伝    | 白玉蟾 | (7) 西山述志     | 劉天眷 |
| (4) 全伝訂訛    | 李長卿 |              |     |

これらについて按文は当時存在せる「旌陽正伝」、「全伝訂訛」、「旌陽後伝」について、何れも胡慧超の撰と伝えられる「旌陽先生修行伝」、胡法超の撰と伝えられる「十二真君伝」に基いて記されたものであると述べており、既に



この二記伝が、早くから幻の伝記となっていたことを示している。また「正伝叙旌陽先生事」は内容の叙述が甚だ詳細であるが、記事一部に頗る不経な部分があるので、これを削汰し、正伝信史のみを伝えるべきであるとしており、更に「西山述志」は旌陽の軼事を収録することが頗る多いと聞いているが、完成せずに終り、その原稿は尽く散失し、今日見ることができないと記している。

ちなみに「十二真君伝」に関しては、そのほか特に触れるところはないが、この書物の来歴について既に書誌学的な考察を加えたように、これには『唐書』芸文志所収の『晋洪州十二真君内伝』、『宋史』芸文志所収『余干十二真君伝』（二巻）の二本が存在した筈である。従って若しも按文に云う如く、「旌陽正伝」、「全伝訂訛」にして、拠るところがあったとすれば、恐らくそれは新本に当る余干撰の「十二真君伝」であったと考えてよい。<sup>(5)</sup> されば前掲七点の記伝の中で宮志纂訂に当って実際に収録・利用されたのは(3)・(4)・(5)のみに過ぎなかった訳であり、(5)の「旌陽後伝」が(1)の『浄明道師旌陽許真君後伝』に当たり、(3)の「旌陽正伝」が(1)の『晋旌陽令許真君実録正伝』、また(4)の「全伝訂訛」が(1)の『浄明忠孝全伝正訛』の原本となっているものと推定することが出来る。

#### 第四節 宮志所収記伝と道蔵記伝との関係

最後に本節において、前述の如き見通しのもとに、両宮志に収録される重要記伝『晋旌陽令許真君実録正伝』、及び『浄明忠孝全伝正訛』の二本について、これと対応する道蔵所収の許真君記伝類を比較し、両者の間の継授関係をさぐり、宮志記伝成立の経緯、並びに編輯の事情について、若干の考察を加えておくこととしたい。まず(1)として掲げた『晋旌陽令許真君実録正伝』の藍本に凝定すべき道蔵本は、同じ白玉蟾の撰とされる『修真十書玉隆集』（卷三十三）所収の『旌陽許真君伝』であるが、この記伝は既に考察した如く、道蔵所収の諸許遜伝の中で、九世紀中頃

に成立したと推定される『孝道具許二真君伝』のあとを承けて、十三世紀ごろに相継いで成立する所謂許真君三伝、即ち『旌陽許真君伝』、『許太史』、『西山許真君八十五化録』の嚆矢をなす最も基本的な記伝であり、その成立年代は北宗の徽宗が許真君に対して奉った尊号「神功妙濟」の晋封（一一二二年）以後、元初の成宗が同じく許真君に對し奉った尊号「至道玄応」の晋封（一二九五年）以前であることは明瞭であって、撰者とされる白玉蟾の生卒年代（一一九四—一二二九）から推しても、遅くとも十三世紀初期には成立していると見て誤りないものであり、その意味で諸許遜記伝類の中にあつて、最も来歴の明らかな資料であると云うことが出来るものである。

また(三)に掲げた『浄明忠孝全伝正訛』の藍本については、同書の原序に

奚取全書稍加刪潤。質以道藏之所紀。録父老之所伝誦。彙為一帙。題曰浄明忠孝全伝正訛。

と記すように、本書編輯の基本となつたものとして「全書」を挙げているが、本書を構成する前掲七点の記伝の中で道藏所収の『浄明忠孝全書』<sup>(8)</sup>に収められるのは前掲の第一・五・六及び七の前半部のみであり、所謂「全書」が『浄明忠孝全書』を指すものかどうか不詳であるが、原序は前記の如く「全書を取りて稍刪潤を加う」と述べており、更にその末尾に至つて、『浄明忠孝全書』が卷五・六に収めている「玉真之語録」及び「中黄之問答」の二篇について「まさに別乗にのせ、浄明忠孝全書別篇と曰うべし」と記していることから、所謂の原序の「全書」とは、『浄明忠孝全書』を指すものと見てほぼ誤りあるまい。問題の『浄明忠孝全伝正訛』とは『浄明忠孝全書』の前記二篇を別乗に移し、新たに「蘭公譚姆伝」、「伝教十一真人伝」、「際真胡詹許伝」、及び重輯本が増補せる「嗣教四先生伝」中の趙宜真・劉淵然の二伝を増収したものと見做すことが出来るようで、これら『浄明忠孝全書』に欠ける部分の記伝が、云わば原序に掲げるところの「道藏の紀すところ」に当たり、「父老の伝承」に該当するものと見るべきもののようで、問題の記伝を敢えて「全伝正訛」と名付ける所以もこの辺にあるものと推測される。

次に、ここで煩鎖をいとわず、宮志本記伝類の中核をなし、初期許遜仙道教団史研究の最も主要な資料である『晋旌陽令許真君実録正伝』と、その藍本に当たる道藏本『修真十書玉隆集』（卷三十三）所収の『旌陽許真君伝』を比較し、宮志記伝纂訂の背景、或は趣旨について窺見してみよう。両許遜記伝が完璧な対応を示す主要部分の一部について、比較対照を試みるならば、次の如くなる。

### 旌陽許真君伝

自東晋乱離江

左頻擾。真君所居環百余里。盜賊不入閭里晏安。年穀屢登。人無災害。其福被生靈。人莫知其所以然也。至孝武帝寧康二年甲戌。真君年一百三十六歲。八月朔旦。有雲仗自天而下。二仙乘輦導從甚都。降于真君之庭。真君降階迎拜。二仙曰。奉玉皇命賜子詔。真君伏以聽。乃宣詔曰。上詔學仙童子許遜卿在多劫之前。積修至道。勤苦備悉。經緯愈深。萬法千門罔不師歷。救災拔難。除害蕩妖。功濟生靈。名高玉籍。衆真推仰。宜有甄昇。可授九州都仙太史兼高明大使。賜紫綵羽袍瓊旌宝節玉膏金丹各一合。（中略）遂乘雲車而去。真君乃召門弟子與鄉曲耆老。諭以行期。自此朝夕会于真君之第。日設宴飲共叙惜別。且教以行善立功。以致神仙之旨。著靈劔子等書。又與十一弟子各為五言二韻勸誠詩十首以遺世。及以大功如意丹方伝衆弟子不與上昇者。此方即丁義神方中一也。其訣必先擇日齋戒設位。醺十八種菓之神。然後書符逐味誦呪。而

### 晋旌陽許真君実録正伝

自

東晋乱離江左頻擾。惟祖師所居環百余里。盜賊不入閭里晏安。年穀屢登。人無災害。其福被生靈。人莫知其所以然也。至孝武帝寧康二年甲戌。八月朔旦。有二僊擁雲仗而下。蓋玉真上公崔子文。元真上卿瑕邱仲也。導從甚都。降于真君之庭。宣上帝詔命。真君再拜登受。二仙去。

真君乃召門弟子與鄉曲耆老告之曰。今者天詔降於我九州都遷太史兼高明大使。冲举有期。仙使告我矣。乃設齋宴共叙惜別。且以行善立功淨明忠孝之旨。反覆開陳。三致意焉。著靈劔子等書。又與十一弟子各為五言二韻勸誠詩十首以遺世。今存詩八首及（以）大功如意丹方伝衆弟子不與上昇者以濟世。即丁義神方中之一也。

修合之。其治衆疾。如意而愈。是月望日大宮齋會。徧召里人。長少畢集。至日中遙聞音樂之聲。祥雲弥望。須臾漸至会所。羽蓋輦車。從官兵衛。仙童綵女。前後導從。紅霞紫氣。舒布環遶。前二詔使又至。真君降階拜迎。二仙復宣詔曰。上詔學仙童子許遜脫子前生貪殺。匿不祀先祖之罪。錄子今生呪水行符治病。罰惡滅毒之功。已仰潛山司命官。伝金丹於下界。(中略)仍封遠祖由玉虛僕射。曾祖琰太微兵衛大夫。先祖玉太極把業錄籍典者。父肅中嶽仙官賜所居宅。曰仙曹左府。(下略)

是月望日至日中。遙聞音樂之聲。祥雲弥望。羽蓋輦車。從官兵衛仙童綵女。前後導從。紅霞紫氣。舒布還遶。前二仙使又至。宣詔畢。  
仍封遠祖由玉虛僕射。曾祖琰太微兵衛大夫。祖玉太極把業錄籍典者。父肅中嶽仙官賜所居宅。曰仙曹左府。(下略)

右の上段に掲げる道藏本『旌陽許真君伝』(第十四・十五紙)の記述は、淨明道の祖師とされる許遜が初めて玉皇によって昇仙を約束され、「致神仙之旨」を授けられてのち、二仙の來迎を受けて騰昇する許遜の神仙化・教祖化の経緯と、その理由を闡明する重要な部分であるが、既に触れた如く、互に密接な継授関係にある上下対照の記伝の間に、次の如き大きな二つの削除と、一つの重要な改換のあることに注目しなければならない。即ちまず玉皇から許遜に下された昇仙予告の宣示とは「(學仙童子許遜)子、多劫の前に在りて至道を積修し、勤苦悉く備わる。経緯愈々深く、万法千門師歴せざるなし。災を救い、難を抜き、害を除き、妖を蕩い、功生靈を済い、名玉籍に高く、衆真推仰す。宜しく甄昇有り、九州都仙太史兼高明大使を授くべし」云々の言であり、更にこの予告の通り、同じく東晋の寧康二年(三七四)の八月十五日、二仙を降して許遜を昇仙せしめる際の宣示「子、前世殺を貪り、匿れて先祖を祀らざるの罪を免がる。子、今生呪水、行符、治病、罪惡、滅毒の功を録し、已に潜山司命の官を仰ぎ、金丹を下界に伝う」の部分は、下段の『晋旌陽令許真君実録正伝』にあって凡て削除されており、恰も昇仙が当然自明のこと

として、その結果のみを叙述する大巾な改換が行われている。また『旌陽許真君伝』において、昇仙に際し許遜が郷閭の門弟に与えたとされる「致神仙之旨」（第十四紙）の教法が、『晋旌陽許真君実録正伝』に至って「浄明忠孝之旨」（第十五紙）と改換されており、更に許遜の浄明忠孝道の悟得を「厥後遇日月帝君。授以浄明靈宝忠孝之道。自是道益進」（第六紙）と記し、浄明道の祖師としての許遜の地位を確定する決定的な記述の竄入によって、これと符節を合せているのが認められる。この点は宮志本本記伝類を通じて見られる改竄・補訂の基本的、且つ典型的手法の事例と云ってよいものである。煩雑を避けて原文の対照を控えるが、これに類するもう一つの顕著な改換の事例を追加指摘しておく。即ち道藏本『旌陽許真君伝』（第二紙）は冒頭に許遜の生い立ちを叙して「句曲山遠遊君邁。護軍長史穆。皆真君再従昆弟也」と記し、祖師許遜と句曲山、即ち茅山に在る茅山上清派をより立てた許長史及び許邁との間の再従昆弟同志の繋縁関係を誇っているが、宮志本『晋旌陽令許真君実録正伝』（第十六紙）は、悉くこれを抹殺しないまでも、単なる一伝承として取扱ひ、末尾の付記にゆだねている事実も、また新宮志記伝編纂の基本的な立場を窺わしめるものがある。

明初以来、玉隆万寿宮において再三再四繰り返されてきた宮志纂輯の趣旨については、既に小論の中においても言及するところがあったが、叙上の乾隆・光緒宮志所収『晋旌陽令許真君実録正伝』と、道藏所収『旌陽許真君伝』の比較を通して、確認された大きな補訂・改削のもつ意味については、基本的には『旌陽許真君伝』の成立する十三世紀初期と、『晋旌陽令許真君実録正伝』が編纂される十九世紀後半における許真君の宗教的地位、並びにその間における許遜信仰自体の変化に基づくものと考えてよいであろう。既に論じたように、古く東晋に発する許遜仙道教団は六朝から唐にかけて、南昌の西山を中心として隆退を繰り返すが、北宋に至り、祖師許遜が宋朝の公的な国家的祭祀の対象とされ、許遜のもつ神秘的靈威に対する人々の信仰は着実に進展し、更に元代に入って玉隆万寿宮道士の劉玉によ

る許遜仙道教団教法の大巾な改革によって、所謂浄明道が皮脱・成立するに及んで、祖師許真君に対する信奉は社会階層の上下を超えて定着することになる。かくして『晋旌陽令許真君実録正伝』は、既に贅設となった許遜の神仙化・教祖化の経緯に関する錯雑せる『旌陽許真君伝』の説明部分を削除し、合せて許真君の浄明道祖師としての地位を闡明すべく、叙上の如き改換・増損の筆を加えたものと見做して誤りないであろう。宮志の編者が『晋旌陽令許真君実録正伝』の纂輯に当って、これに如上の重要な改削を施しながら、その撰者を依然として白玉蟾としているのも、自ら新記伝の編纂を意図したのではなく、白玉蟾の『旌陽許真君伝』撰述後、五百余年間における許遜信仰の変遷に應對しつつ、浄明道教団の本山志に当る『道遙山万寿宮志』所収の浄明道祖師伝相應の改削を施したものであることを示唆するものであらう。

## 注

- (1) 『許太史』伝 歷世真仙体道通鑑卷二十六所収 道藏洞真部記伝類 一四三冊。  
拙稿 許真君伝考——浄明道研究序説—— 集刊東洋学 第十五号。
- (2) 『許太史』伝が『旌陽許真君伝』を承けて撰せられたものであると推定されることは、既に前掲拙稿(2)において述べたが、両者を対照して見出される相違点の一つに、前者の注文混入の操作がある。一・二の具体的事例をあげるならば、『許太史』伝の本文の中で、呉許二君が諶姆を訪れてのち「遂建祠宇。亦以黄堂名之崇道觀。每歲仲秋云云」(第五紙)と記しているが、『旌陽許真君伝』は傍線の部分を「今号崇真觀」との註によって記している。同様な例は第十三紙にも認められ、予章における許遜と郭璞との神秘行を証する「今印文猶在」との割注を『許太史』伝はそのまま本文の中に入れてゐる。
- (3) 拙稿 旌陽県と玉隆万寿宮——浄明忠孝道の歴史地理 (一)—— 文経論叢 第四卷第三号 参照。
- (4) 拙稿 許真君伝考補遺——「十二真君伝」を中心に—— 文経論叢 第二卷第一号。
- (5) 前掲 注(2) 参照。
- (6) 白玉蟾の生卒年代について記述する記伝には『道遙墟経』道藏第一〇八一冊と『道遙山万寿宮志』(卷十五)所収「玉隆正書白真人伝」があり、生年については宮志が紹熙甲寅(一一九三)三月十五日、卒年については『道遙墟経』が宋

の嘉定（一二〇八—一二四）中往く所を知らずと記し、一方の宮志は、それと一致する一二一九年（三十才説）のほが、一二二九年（三十五才説）及び不明説を打ち出している。本論においては一応三十才説に従ったが、神人と称される人物の年寿としては余りにも短命であり、何れかに誤りがあるのではないかと疑われるが、吉岡義豊博士は「道教々団の系譜」（歴史教育第十七巻第三号）において、卒年は不明ながら、生年を一一三四年としておられる。拠るところは不詳であるが、紹熙甲寅を紹興甲寅の誤りとすれば、生年は一一三四年と云うことになる。然し何れを採るにしても本論の論旨に直接的な関わりはない。

道蔵 太平部 七五七冊。

修真十書玉隆集 卷三十二所収 道蔵一二七冊。

拙稿 許遜教団と浄明忠孝道について 吉岡義豊 M・スワミエ編 道教研究 第三冊。中国近世宗教史の展開における浄明道の役割について 集刊東洋学 第三十一号 参照。

(10) (9) (8)